

研究主題「不登校の解消をめざした児童生徒への指導援助の在り方」

～人間関係を育成するスキル学習や支援カルテの活用を通して～

平成16年度 久留米市教育研究所教育相談研究班

久留米市教育委員会 青少年育成課 吉澤 隆

久留米市立青陵中学校 養護教諭 今村 寿子

1 主題設定の理由

大人たちの多くはかつて子どもの頃に体験的に家庭や地域社会でソーシャルスキル（対人関係のコツみたいなもの）を身につけていた。そして当時は学級のほとんどの児童生徒がだいたい同じようなソーシャルスキルを身につけていた。

しかし、現代の児童生徒はこのソーシャルスキルがあまり身に付いておらず、そのことが不登校及びに不登校兆候の児童生徒を生み出す原因となっている。

そこで、児童生徒がソーシャルスキルの必要性を理解し、ソーシャルスキルにそった行動をしたら友達との関係が良好になったという体験を味わい、自ら意識してそのスキルを活用する学びを教師が指導援助していくことは大変意義のあることと考え、本主題並びに副主題を設定した。

2 主題の意味

（１） 不登校の解消をめざした児童生徒への指導援助の在り方とは

不登校の解消をめざすには学校や児童生徒の状況に応じて「3つの視点」(福岡県センター指針)から積極的にアプローチしていくことが重要とされている。

・第1の視点「不登校を生まないための予防、開発的な支援」

・第2の視点「不登校兆候を示す児童生徒への支援」

・第3の視点「不登校児童生徒への支援」

本研究では、主に第1、第2の視点に立った新たな不登校を生まない児童生徒への指導援助のあり方を研究することにした。第3の視点は家庭訪問等の個別対応であるので本研究になじまないと考えた。

本研究の意味は、不登校を生まない予防・開発的な支援としての授業づくりや人間関係

づくりの在り方と不登校兆候の児童生徒を早期に発見し、その児童生徒への指導援助の在り方を明らかにしていくことである。

（２） 人間関係を育成するスキル学習や支援カルテの活用とは

本研究で言うスキル学習とは次のような展開で行う。まず児童生徒の不足しているソーシャルスキルをQ-Uやエゴグラム等を用いて把握する。次に、課題解決のための単元計画を作成する。そして、学級全体や個別で習得すべきスキルを構成的グループエンカウンター等の方法を用いて学習させる。さらに、実践を繰り返し、再度Q-Uやエゴグラム等での実態調査を行い、その成果と課題を検討する。

支援カルテの活用とは、保健室登校しているような不登校兆候の児童生徒に対して、支援内容や支援方法等を明確にするために、期間を区切ってその内容や成果と課題を記録することで支援の質を高められるようにするものである。また記録したカルテを生徒指導部会等に問題提起し、対応についての協議を深められるようにもする。これらの指導援助のプロセスを過ることによって、児童生徒が自己の存在感を実感しながら、学校を精神的な充実感を得られる「心の居場所」にできるものとする。

3 研究の目的

児童生徒の実態から出発し、支援カルテの活用や児童生徒の不足しているソーシャルスキルを身につけさせ、よりよい人間関係を育成することで不登校の解消をめざす。

4 研究の仮説

児童生徒が、自分の行動や友達関係についての悩みや問題を自らの問題ととらえ、支援カルテの活用やソーシャルスキルトレーニングと構成的グループエンカウンターを統合し

たスキル学習を行っていけば、対人関係の技能を身につけ、現在の適応状態を改善したり、将来の精神面の問題に対して予防的な効果を発揮したりすることができるであろう。

5 研究の内容

(1) 児童生徒の実態を把握する手だての工夫をする。

(2) 実態に即したよりよい人間関係を育成する単元構成を計画する。

(3) ソーシャルスキルトレーニングと構成的グループエンカウンターを統合し、学習過程に位置づけた指導援助の工夫を行う。

(4) 一人ひとりの児童生徒にあった支援内容や方法の工夫(支援カルテ)を行う。

【実践事例】自尊感情を高め他者を理解する心を育てる指導の試み

～ソーシャルスキルトレーニングと構成的グループエンカウンターを統合したふれあい活動を通して～

1 実践の概要

本実践は、不登校兆候生徒の自尊感情を高め、学級全体に他者を理解しようとする心を育てることで、不登校の解消をめざすものである。そのための手だてとしてソーシャルスキルトレーニングと構成的グループエンカウンターを統合した実践をおこなった。

2 研究の構想

(1) 学級集団の状態を把握する

学級集団の状態、個人と学級集団の関係を把握できるQ-Uを実施する。これにより生徒の学級満足度を知り、不登校兆候(要支援)の生徒を早期に発見することができる。また、エゴグラムを用いることで生徒一人ひとりの心の状態を把握する。エゴグラムの実施そのものが、生徒自らがバランスのとれた心の状態や他者とのよりよい接し方を考えることができる。

(2) 自尊感情を高め他者を理解する心を育てるための単元計画を作成する(全8時間)

期	レベル	ソーシャルスキル	配時
	容易 (個人)	基本的な聞く態度 基本的な話す態度 Q-U	1

	容易 (2人組)	許容的態度 能動的な参加 エゴグラム	1
	時々協力必要 (班)	対人関係マナー 感情表出 すごろくトーキング	2
	協力前提 (中集団)	反省的態度 自己主張	2
	試行錯誤 (学級全体)	能動的な援助 対人関係形成行動	2

配慮のスキル かかわりのスキル

(3) ソーシャルスキルトレーニングと構成的グループエンカウンターを統合した実践を行う

ア ソーシャルスキルトレーニング

ソーシャルスキルとは対人関係を円滑するコツみたいなもので、「何か失敗したときにあやまれているか」などの対人関係のマナーである**配慮のスキル**と、人とかかわるきっかけや関係の維持、感情交流などの行動が伴っている**かかわりのスキル**という2つがある。

イ 構成的グループエンカウンター

構成的グループエンカウンターとは活動のルール・ねらい・やり方を構成したプログラムをリーダーの支援のもとに行い、エンカウンター(心の交流)するグループ体験学習である。ソーシャルスキルを習得するためにはグループでの体験学習が欠かせない。生徒がソーシャルスキルにそって行動したらうまくいったという体験をすることにより自ら意識してそのスキルを使うようになると考えられるからである。

ウ ソーシャルスキルトレーニングと構成的グループエンカウンターを統合することのよさ

すべての生徒が自己開示できる活動をするためには、活動の中に一定のルールやマナーがあることが大切である。そして活動を通して、楽しみながらソーシャルスキルを発揮し

てよかったという体験をシェアすることで、今後も様々な場面でスキルを活用するようになると考えた。

(4) ふれあい活動の支援の工夫

- ア 交流を促すグループわけ
- イ T・Tを活用したモデリング
- ウ 個に応じた教材提示
- エ 思いを書き込みやすいワークシート
- オ リラックスできる環境の設定

3 研究の実際

(1) 学級集団の状態

客観的にクラスの状態をとらえ、一人ひとりの心の状態も把握するためにQ-Uとエゴグラムによる分析を行った。

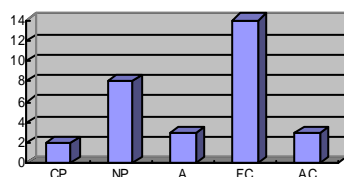
ア Q-Uの実施結果から

Q-Uの結果から学校生活満足群15%、非承認群45%、侵害行為認知群6%、学校生活不満足群30%であることがわかった。非承認群の生徒が多いということは、人から認められることや自主的に活動することが少ない生徒が多いと考えられる。また、学校生活不満足群の生徒達は学級のなかに自分の居場所がないと感じている可能性がある。なかでも要支援のAはスクールカウンセラーのカウンセリングを受けていて、本実践後の変容をみていきたい。

イ エゴグラムの実施結果から

エゴグラムとはCP(批判する私)、NP(優しい私)、A(考える私)、FC(自由な私)、AC(人に合わせる私)のどの部分かその人の行動を支配しているかを知ることができる分析方法である。本実践では単にアンケート的に使用するだけでなく、学級活動の中で実践の一つとして実施することにした。

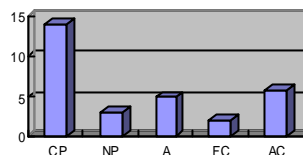
グラフ1 学級のエゴグラム(ピークエゴグラム)



・FCが高いことから遊び好きの行動派が多く自己肯定的な傾向があると見られる。

・次にNPも高いことから気が優しく共感的で他者肯定的な傾向もあると見られる。

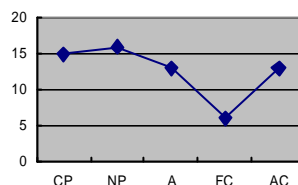
グラフ2 学級のエゴグラム(ボトムエゴグラム)



・CPが低いことからやらなければならないことがなかなかできず苦手である。

・ACも低いことから他人に左右されず個性的で非協調的な傾向があると考えられる。

グラフ3 要支援Aのエゴグラム



・NPが高くFCが低いことから優しく思いやりがあるが、子どもらしさや感情を抑制する傾向がある。

(2) 検証授業(第2学年6組学級活動) 実践3「お互いを知るためのすごろくトークング」

本実践では、グループ内で認め合うような話し合い活動をさせ、お互いのよさに気づき、自己肯定感が高まるようなエクササイズを構成的グループエンカウンター的手法と統合させたソーシャルスキルトレーニングを行いたい。「すごろくトークング」は誰でも話せるようなテーマをゲーム感覚で楽しく取り組める。自己開示するにも「好きなテレビ番組」や「行ってみたいところ」など誰でもが話しやすいテーマで容易にできると予想される。

(3) ふれあい活動の支援の工夫

ア 交流を促すグループわけ

あまり緊張感をもたずに話し合い活動ができるように1グループ5、6人であらかじめ生徒の代表と話し合い男女別の仲のよい生徒同士の構成とした。

イ T・Tを活用したモデリング

対人関係のマナー（配慮のスキル）と感情表出（かわりのスキル）をわかりやすく示すためにT・Tを用いたモデリングをおこなった。相手にわかりやすく話をすることと相手の話を共感的に聞くことをいくつか示して、学んだスキルを活用しながら楽しく活動できるようにした。

ウ 個に応じた教材提示

すごろくトークングでは「好きなテレビ番組」や「心配なこと」など誰でも話せる内容をテーマ（マス）にしている。しかし、「家族の事」や「得意なこと」など生徒によっては応えられない場合も考えられる。そこでいくつかの違うバージョンを用意し、グループの構成メンバーなども考えながらより活発に話ができるように配慮した。

エ 思いを書き込みやすいワークシート

ワークシートはシェアリングの際に記入しながら活動を通して思ったこと、気づいたことを記入しやすいように、「A君が『趣味』でマジックをしているのはおどろいた。今度見せてほしい！」などの記入例を示しておいた。

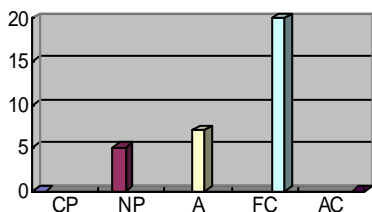
オ リラックスできる環境の設定

よりリラックスした雰囲気の中で活動できるように、BGMを使用した。また、ウォーミングアップの段階でゲームを取り入れた。ゲームはそのまま活動するグループになるように仕組んだ。

（４）ふれあい活動後の生徒の変容

実践後のエゴグラムは以下の通りであった。

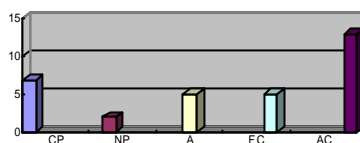
グラフ4 学級のエゴグラム(ピークエゴグラム)



・FCは実践前より高くなった。自己肯定的な生徒が増えたと思われる。

・次にAが高いことから冷静な自分を持ち始めた生徒が増えたと考えられる。

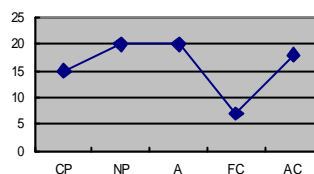
グラフ5 学級のエゴグラム(ボトムエゴグラム)



・ACが増えたことから周囲に気兼ねなく自分の思いを伝えることができる生徒が増えたと考えられる。

・CPが低い生徒が実践前より減っている。学級内に適度な厳しい見方が増加したと考えられる。

グラフ6 要支援Aのエゴグラム



・AとACが上がっている。自己主張はまだだがまわりと自分との関わりを冷静にとらえられるようになってきているようだ。クラスでの表情も明るくなってきている。

（５）実践研究の成果と課題

ア 研究の成果

（ア） 生徒の実態をエゴグラムやQ-Uで客観的に把握し、課題解決のための単元計画を作成することは有効であった。

（イ） 実態に即したソーシャルスキルトレーニングと構成的グループエンカウンターを統合したふれあい活動は、生徒の自尊感情を高めることができた。他者理解については身近な人間関係については有効であった。

イ 今後の課題

（ア） 日常の学校生活全般においてのスキル学習の実施

（イ） ソーシャルスキルトレーニングや構成的グループエンハウターの手法を学年や学校全体へ拡大

<参考文献>

・河村茂雄「小学校・中学校編 グループ体験による学級育成プログラム ソーシャルスキルとエンハウターの統合」(図書文化)

